

好人

登場人物

小野木 美好（おのき みよし）

高校二年生。どちらかというとも真面目。タケオと付き合うことになる。

佐々木 タケオ（ささき たけお）

高校二年生。不良ではないが、素行悪し。美好のことが好き。

「タケオ、います？」

隣のクラスに入ってすぐにいる、体育とかでたまに同じグループになる比較的話しやすい女の子に聞くと、

「タケオ？ あ、ああ、佐々木ね。佐々木なら、四時間目からいなかったわよ」

「あいつ、またか……」

人前でなかったら、「ちっ」とでも舌打ちをしたらろう。私の心境は、言葉のとおり「またか」というものそれだった。

私の手には、二つ分の弁当箱。一つは自分用、もう一つは男子が食べるぐらい大きめの。それは、タケオの分であって、昨日、奴から「美好<sup>みよし</sup>の弁当、食いたいなー」などと言われたので、早起きして作ってきたというのに、それを言った本人はもう既に教室から姿を消していた。

こういったことは、もう何度もあることで。

タケオの奴ときたら、出席日数が足りずに留年するんじゃないかってくらい、授業にまともに出ていない。

「ああ、でも、バックはあるみたいだから、まだ学校にはいるんじゃない？」

そう言われて、タケオの机を見ると、肩下げのスポーツバックが横に垂れ下がっていた。

「……………」

そうなる、もう居場所はわかっている。そう、あそこしかない。

扉を開けるとそこは雲一つないまっさらな空が広がっていた。

うちの学校は屋上に鍵が付いていない。それは自殺者が絶対にでない自信があるとかそういうことではなく、ただ単に屋上を覆い囲うように人の背丈の1.5倍もの高さのフェンスがあるからで。

いくら位の予算がかかったか私にはわからないその高いフェンスは、自殺を予防してくれても、サボりは余計増長させてしまっているような気がする。

「もうっ、ここにもいないじゃない！」

二つの弁当を手を持って、やってきた屋上には誰も人がいなかった。タケオの奴は、授業をサボる時はたいていここにいるのだが、今日は気分が向かなかったのか、ここにもいないようだった。

「うー、こうなったら、全部一人で食ってやる」

そう言って、たった一人の屋上で、女の子二人半分ぐらいのお弁当を広げようとすると――。

「おい、それはオレの分だ」

と、階段の上、屋上よりもさらに高い場所から聞き慣れた奴の声が聞こえてきた。

「タケオ……………」

「よっと」

階段の屋根からその身を翻して降りたそいつは、佐々木という姓の私の幼馴染で、その降りる様はいつものように危なっかしかった。

「もう、またそんなところで授業サボって、出席日数足りなくなってもいいわよ」

「あー、大丈夫だって、あの先生、テストの点でしか成績つけないし、それにいまやってるとこはだいたいわかっている」

こいつのだいたいというのは、非常にやっかいで、授業にもろく

に出ないくせに、こいつは本当にだいたいわかってしまっているのだ。私なんか予習復習を重ねて、ようやく到達するその位置に、こいつはそのだいたいで、簡単に辿り着いてしまう。そのせいで、こいつは物事を真面目にやるという観念をこの年まで得ることができないでいるのではないかとも思う。

「もう。でも、そんな場所において、ひょっとしてタバコとか吸ってないでしょうね？」

「吸ってないよ。今月は小遣いがもうないから」

お金があったら吸うの？　と言いたいところだが、不良然としていたタケオだが、タバコは一度も吸ったことがないと思う。それは幼馴染という長い時間いっしょにいて、私は一度も吸っているのを見たことがないし、それにタバコのあの臭い匂いもこいつからしたことがないからだ。

「それよりさ。さっさと飯にしようぜ。オレ、腹減った」

そう言って、私の傍にある大きめの弁当箱にタケオは手を伸ばそうとしたが、私はそれを阻止するように、タケオの伸ばしてきたその手をはたいた。

「なんだよ？　これ、オレの分だろ？」

自分の手をはたかれたことが本当に意外だったのか、驚いたような顔でそう反論してきた。

「その前に、言うことがあるでしょ？」

「言うこと？　………なんだ？」

こいつは――。

私が無言で睨んでいると、私が怒っているのに気が付いたのか、タケオは「あー」と、手を打って。

「自分の分の弁当に手を出したから怒ってんのか」

と、見当違いのことでなにか納得し始めた。

「ちがーう！　今日、約束してたことをあんたが忘れてることを怒ってるのっ！！」

そもそも、私がタケオより大きなお弁当を食べる訳がないでしょ。

とも言いたかったが、それを言うとタケオがそっちの方に話を変えてきそうな気がしたので、それは黙っておくことにした。

「約束？　なんか、してたっけ？」

「今日、私なんのためにお弁当作ってきたと思ってんの！？」

「オレのためだろ？」

さも当然のように言う。

「そ、それはそうだけど、あんたが今日は私の弁当が食べたいって言うから、こっちは朝早くから起きて作ってきて、それにまたすれ違ったらいけないと思って、昼休みになったらすぐにあんたの教室に行ったのに、あんたは四時間目からいないっていうじゃない」

「あー、それで怒ってんのか？　美好は細かいこと気にするなあ」

と、そうしゃべりながら、タケオは大きめの弁当箱のエビフライを一つ取り出して、自分の口に放り込んだ。

「もう、しゃべってる最中に食べ始めるな」

「いいじゃん。オレ、お前なら、前もって言うっておかなくても、ここに来ると思ってたし、それにもうそういうこと言わなくても良い仲だろ？　オレたち」

「うぐっ」

『言わなくても良い仲』というのが、私を縛る。

「お前、また料理上手くなったなあ」

と、自分では一切、料理を作ることのないその手が、おかずを再び口に運ぶ。

言わなくても良い仲というのは、一般的なそれ系の話で、もう10年に及ぶというこの幼馴染に、突然の告白めいた一言を言われたのはつい1カ月前。その一言に思わず（そう、本来ならもっと真剣に考えるというか拒否しなければならなかったにも関わらず）肯いてしまった自分に最大の非があるのだと思う。

「なあ、オレたち、付き合わないか？」

「はっ？」

その一言を信じられないという表情で私は聞いた。

「だから、付き合おうって言ってんの」

「付き合おうって、あんた、なに言って……」

「いやさ、オレたち、もう十年來の仲じゃね？　ここらでふんぎりつけといた方がいい気がするんだよね」

そう言うタケオの感じは、もうすでに付き合うことを前提に話を進めていて、付き合う付き合わない以前の問題のことなんて、その口調は一切無視していた。

「でも、私とあんたじゃあ……」

「お前、そういう細かいこと気にすんの？」

「気にするっていうか、普通そういうの良くないと思うし……」

「あー、オレ、初めての告白だったのになー。それに美好とは両想いだと思ってたから、断られるとショックだわー」

こっちの返答なんてお構いなし、タケオは自分でそう納得して、その場から去っていかうとした。

「ちょ、ちょっと待って」

「なんだよ？　愛の告白を袖にされて傷心なんですけどー、オレ」  
愛の告白とか、そういうことを恥ずかしながら言うな……」

「だ、誰も断るなんて……言っていないじゃ……ない……」

ああ、もう私ったらなんてことを言ってるんだろう。そんなの……幼馴染だからって、ちゃんと断わらなきゃいけないのに。

「マジ？　ほんと？　じゃ、オーケーなんだ」

「えっと、その……ちょっと……考えさせて」

もうなにを言っても、末尾の言葉が小さくなる。私はそれくらい、目の前の問題をどう対処すればいいのかわからなかった。

「ダメ。恋愛なんて、フィーリングだろ、フィーリング。オレのことなんて、もう十分知ってたから、イエスかノーをこの場で言ってくれ」

そう言われて、私は本当になにかたかが外れてしまったのだろう。

これを断って、もしタケオとの縁が切れてしまったら、そう思うと口は「イエス」という三文字を告げていた。

「よし、そんじゃ決まり。今日から、そういう仲ってことで」  
そう言うとタケオはバックを肩に担いで歩き始めた。

私は、ただ自分の言ったことの意味を反芻するのに精一杯で、ぼくと突っ立っていると。

「あ、でもさ。いままでもいっしょに帰ったりしてるから、これからもやることは変わんねーよな」

と、振り返りながらタケオは無邪気に破顔した。

「なんだ、そんなに気張って来ることなかったのに」

休日、駅前の広場で待ち合わせにやって来たタケオは、開口一番そう言った。

「あんたは………いつも、どうりね」

こっちは上から下まで、高校生が頑張ってる出来る範囲では上等の服装、メイク。でも、その隣を歩くはずの目の前の幼馴染は、簡素なプリントのTシャツとジーンズといった出で立ちで、この服を選ぶのに小一時間もかけた自分がすごく恥ずかしくなった。

「別に付き合ってたんだから、そんなに気張らなくてもいいんだぜ」

「バツ………」

「バカ」と、言おうとしてその声大きいのに気が付き、途中で止める。周囲がこっちを注目したのではないかと、視線を巡らせるが、幸いなことに都会の雑踏は人ひとりの叫び声など簡単に飲みこんでしまった。

「そういうのは、あんまり人前で言わないでしょね」

「そういうの？ なにを？」

こいつは、本当になにもわかってないのか、完全にそれについて気にしていないようだった。

「だって、学校とかに知れたら大変でしょ？」

「ああ、そういうこと。お前さあ、気にしすぎ。普通の人間だったら、オレたちの会話の中で「付き合う」でワード出てたら、買い物に付き合うとかそういうの連想するぜ」

ああ、それもそうか。付き合っているっていろんな風に解釈出来る言葉で、私はタケオと付き合っているからそう解釈するわけで。違う人から見たら、そうは解釈されないのだなあと考えると、私は少し寂しくなった。

「さて、そろそろ時間だぜ。行こうぜ」

気が付くと、映画の開始10分前で、本当はもっと余裕のある待ち合わせ時間だったのだが、タケオが遅れたせいでぎりぎりになっていることを、やつは一切悪びれた様子ではなかった。

そうして、歩いて5分程度の映画館へと歩き出す。タケオの歩幅は、私のそれより若干広いので、気を抜くと少し遅れる。

「でもさ、そういう服着て来てくれるのは、正直嬉しいよ」

歩くことに集中していると、斜め少し上にある頭がそう言った。

私は、言われたことを理解できないまま、そちらの方を見ると、いつものような笑顔でこっちを見ているタケオがいた。

もう、そんな顔で、そんな声を聞いたら、もうどうしようもなくなっちゃう。だから、

「……………だって、それはそれなりにしておきたかったんだもの」  
消え去りそうな声で、そう言うのが私の精一杯だった。

「なーんかなー、奮発した割にはあんまりな味だったな」

映画を観終わってから、タケオがおごるからということで、少々値の張るお店で夕食をした。私にはもう味とかそういうことじゃなくて、そういう店で食事をする事自体が緊張で、こういうところって、こんな服装で入っていいの？ と、自分の一張羅すら卑下にしてしまった。

「おごってくれなくていいから、次は普通の店にしようよ」

「だろ？ 美好もあんまり美味そうに食ってなかったもんな。次はもうちょっとこじやれた……」

味じゃなくて、店そのものの雰囲気の話なんだけど。タケオの家は私より少し（だいぶ？）上の階級なので、約束事の日には浪費を惜しむな。みたいな家訓があるのかもしれない。

「まあ、いいんだけど」

いつもと違う店の帰りは、いつもと違う道を通るわけで、夜の帳が降りている街は、ネオンがやたらと光っていて眩しい。というか、眩しすぎた。

「なあ、美好」

気付くと、タケオの顔がかなり近くにあり、口はほぼ耳元で、その口元からタケオはずいぶんと男らしい声で囁いた。

「ちょっと、休んで行かない？」

私はもう食事ですら十分休んだし、もうおしゃべりもしたのになにを言っているのだろうとタケオの顔を見ようとすると、タケオの右腕が私の腰を回すように伸びて来て、ぐいと私の体はタケオの方に引き寄せられた。

「ちょ、ちょっと、急になに？」

拒絶しようとタケオの体を押しやると、私は信じられないものを見た。

それは拒絶されたことに慚然としているタケオの顔でもなく、その先にあるネオンがありえない文字。それが私の瞳に写し出されている。

「HOTFL？」

Eの下の横線の電気が切れてしまっていて、HOTFLになってしまっているが、それはもうパチンコ屋のパが灯っていないのがお約束事なのと同じことで、それはもうHOTELとはっきり書かれていた。この付き合ってたった一カ月の目の前の幼馴染は、「映画に行こう」とか「ちょっと洒落た店で食べよう」とか、そういうことを言い始めた動機はこれにあったんだと、私は全て理解した。



「いたっ、お、お前、そこ、急所……」

もう、その魂胆に異様に腹が立って、思い切り足を踏みつけていた。タケオは声にもならないような悲鳴を上げ、その場に飛び上がる。夜になり始めたホテル街の一角の話である。

「もうっ、本当に信じらんない」

ホテル街から程よく離れた公園のベンチに腰を掛け、ひたすら謝罪を続けるタケオにそっぽを向いて、私はそう呟いた。

「いやさ、そろそろ良いんじゃないかと思ってさ」

「そろそろもなにもありません。高い所で食事をしに行くのが目的かと思ったら、ホテル街に寄りやすい店を選んだんでしょ？  
本当に最低」

「いや、本当にそういうとこ鋭いね。美好ちゃん」

乾いた笑顔でタケオはそう応えるが、許してあげない。許すもんか。そうして、ずっとそっぽを向いていると、タケオの方から提案が上がった。

「えっとさ、美好ちゃん、喉とか乾いてない？」

もうその物で釣ろうという魂胆が見え見えだったので、多少無理なことを言う気になった。

「夏ミカンジュース」

「は？」

「夏・ミ・カ・ンジュース」

「夏ミカンジュースって、あれ、夏とかにしか売ってないだろ？  
そんなのどこに売って……」

「いいから、買ってきなさい」

私は有無を言わせぬ顔で、そう命令した。

「はい」

タケオは私が本格的に怒っていることに気付いたのか、少し意気消沈した面持ちで、そう応えた。

それから、タケオは逃げ去るように公園を出て行ったのだが、タ

ケオは私に頭が上がらないのはわかっているのだから、本当に見つけるまで戻って来ないだろう。

ひとけのない公園に一人取り残されたような気持ちで、タケオを待っている。

どうして、あいつとこんな仲になったのか？ 最近、一人になるとそれを考えてしまう。

「本当に……どうしてなんだろう？」

ふうとため息をつく。この一カ月、そのため息は少しずつ重くなっていく。あの時、素直に肯いてしまった自分の気持ちは、自分を裏切ったものではなかった。だからといって、あいつとなんて……

これは後悔というのだろうか、でも、断わっていたらもっと思い息を吐いていたかもしれない。もうその考えは、なんども頭の中を行ったり来たりして、結論なんて出るものではなかった。

そんなことを考えていると、公園の入口の方でガシャンという金属音が聞こえ、数人が公園に入って来る気配がした。

（なんだ、タケオじゃないのか）

そう、あいつを待ち焦がれている自分の気持ちに私は気付くことなく、ぼんやりと宙を眺めていた。

「あれ？ 小野木じゃね」

明らかにタケオではない声が、私の名字を呼んだ。その声の主は、ニット帽にだるだるのズボン、一昔前で言うところのチーマーというべき恰好の男で、それが背後に同じような服装の男を引きつれて、こっちへ向かってきた。

「なあ、小野木だろ。おれ、おれだよ、覚えてんだろ、中学でクラスがいっしょだった」

まるでオレオレ詐欺のように、おれの部分を強調したその男は、確かに中学時代の同級生だった。が、面識はほとんどないと言っていい。それくらい、私とは生活、性格に格差のある相手だった。

「えっと……」

「へえ、小野木さんっていうんだ。名前は？」

別の男が聞いてきた。

「小野木はねえ、たしか、みよしとか言うんだったよな」

「みよし？ どう書くの」

「えっと、なんだったっけ。確か三に好きだったっけ。確か、女子高に行ったんだよな」

「女子高！？ いいなあ。おれたちなんかさ、共学って言っても、男ばっかだからなあ。おれ、三好さんみたいな女子欲しー」

私の返答などお構いなしに、こいつらは会話を進めていく。話したくないオーラを発していても、なんの意味もなかった。

「ねえねえ、三好さんはどういう男が好き？」

「あー、そういや、お前みたいなのが好きだったよな」

私の名前すらちゃんと覚えてなかったお前が、なんで私の好みを言い当てるんだ！？

「えっ、マジ！？ じゃあさ、これからどっか行こうよ」

好みだと言われた男が、満面の笑みで言った。

「今、人と待ち合わせしてるんで」

というか、どっかに行って欲しい。ああ、もうタケオのやつ早く帰って来い。

「別にいいだろ。中学のよしみで付き合ってくれよ」

同級生のそいつが、私の腕を掴んで立たせようとする。それは力任せの行為で、もう最初からこっちの都合なんてお構いなしだったのを私はようやく理解した。

「ちょっと、止めて下さい」

抵抗しようとするが、最初から荒事になることも想定していたのか、こいつらは全く動じなかった。動じないどころか、喜色すら浮かべている。

「いてっ」

その時、なにかがもの凄い勢いで飛んできて、男の一人の頭部に

当たった。飛んできたものは、手に掴めるぐらいの大きさの金属の筒、表面に「夏ミカン」とプリントされた缶ジュースだった。

「てめえら、一体、なにやってんだ！」

缶が当たってうずくまっている男以外の全ての人間がその声の方に振り返る。

その方向には、投げ終わった格好で、男たちを睨みつけるタケオの姿があった。

「おい、大丈夫か」

うずくまっていた男が倒れたので、誰かが声を掛けた。そこにいる全員が倒れた男が気を失っていることに気づき、男たちの顔色が変わった。

「なにしてくれてんだ。この“アマ”」

同級生のやつがタケオに殴りかかる。彼もタケオと中学がいっしょのはずだが、タケオも当時と違って髪を切っているし、“女”だとは認識できても誰かとまではわからなかったらしい。

タケオは殴りかかって来た拳を“いなす”。それで体勢を崩した彼の背に肘が当てられる。

それに続いて、他の男たちも殴りかかったが、タケオはその全てを打ち伏せた。気付くと、最初に缶の当たった男は完全に気を失い、他の男たちは地に体を伏せていた。

「美好、行くぞ」

タケオはそう言って、私の手を取ると走り出す。私の手を握る武緒の手は男よりも力強かった。

外から歌声が聞こえる。

今日も屋上はサボり魔しかいず、そのサボり魔は上機嫌なのか、屋上の階段の上でピアノを弾くような真似をして鼻歌を歌っていた。

「武緒ー？」

私は彼女の名前を呼び、彼女はそれに応えた。

「よう、そろそろ来ると思ったぜ」

武緒はいつもの男のような物言いで、階段の上から降りるとスカートが翻る。この前も思ったが、いつもスカートがめくれそうで危なっかしい。

「じゃ、飯にしようぜ」

そう言うと、武緒は私の手から当然のように弁当箱を取り、さっさとその場に広げ始める。

「あ、あのね武緒。昨日のことなんだけど……」

「うん？　なんだ」

「えっと、その、助けてくれてありがとう」

私は頬を朱に染めながらそう言った。

「別に。自分の彼女を助けるのは当然だろ？」

うん、そう、彼女なんだけど、武緒も私の彼女になるのかなあ？自分の失言でこうなってしまった私と武緒の関係だが、未だにちょっとその感覚に馴染めない。

「でも、いったい、いつの間にあんなに強くなったの？」

私の知っている範囲の武緒は、運動は活発だけど、荒事が得手だったわけじゃないと思うのだけど。

「ん？　ああ、あれか通信教育で空手習ったから、だいたいわかった」

「ああ、まただいたいね……」

通信教育程度の女の子の空手に叩きのめされるあいつらって……

「おお、今日も良い天気だねえ」

手を翳しながら、空を見上げる武緒はもう次のことに興味を移していた。まあ、こういうやつなんだ。

佐々木武緒——17歳。私の幼馴染、自分のことを「オレ」なんていうけど、心身とも（のはず？）に女の子。当面、私の交際相手になるのだが、当面というのがかなり先にまでなるのはこの時の私は知らない。ただ、二人がどういう行く末を辿るとしても、まあ、

武緒といっしょにいるのは楽しい。うん、これは嘘じゃない。

あとがき

まあ、あとがきです。

プロット構築から一週間で作るつもりだったこの作品はおよそ一カ月かかりました。

うん、短いくせにね。短いのにね。一体、やる気があるのか！？って話ですよ。

作品の読み方は「すきひと」でも「こうじん」でも「はおれん」でもいいです。特に気にしてません。好きな呼称で呼んで下さい。

で、これ読んだ人って、あれはどこで気付きましたかね。まあ、ところどころ伏線を入れていたんで、ここで気付いたら「あんたは天才」って思った個所を忘れました（笑）　なんで前半で気付いた人はすごいんじゃないかな。って思います。

あと、人によってヒントの具合が違いますね。このネタを話したことのある人もいますし（ここら辺を騙せてたら、作者冥利に尽きるんだけど）、あちきが“きのこスキー”だっていうのを知っていれば、「あ、パクリやがった」って連想できたかもしれませぬ。

ま、本文を読まずにここを見ている方は、ちょいとした倒錯小説な一んで、そんな感じですよ。短いのでさっくり読んでみて下さい。

それじゃ、2009年10月6日　虎舟。